

中国人が抱く民族間の偏見
—中国在住者と在日中国人の比較—

問題と目的

現代中国の民族格局は「多元一体化」になっている一方で、漢族と少数民族の間に、民族矛盾が存在しているという状況である。矛盾が起こる原因は、漢族にとって、少数民族の特有な政策に対して不満を感じている。少数民族にとって、少数民族地域の発展落後に対して不満を感じている。お互いに不満感を感じている状況のせいで、民族間の偏見を起こった。本研究では、他集団とどのような接触することは自集団内の民族偏見を減少することに有効であるかに関して検討していく。

研究対象と方法

日本在住中国人 46 人と母国在住中国人 59 人、合計 105 人の漢族の方を対象として、質問紙調査を実施した。質問内容は（１）生活満足尺度（２）外集団接触尺度（３）少数民族に対する親切感/偏見尺度（４）少数民族接触種類（５）少数民族イベントに対する考え方（６）抵抗感尺度から構成されている。

結果と考察

八つの情景で少数民族の方へ抵抗感の強さから、調査対象者は少数民族に対する民族偏見の強さを意味するという調査で、国内に住んでいる中国人と在日中国人の二つのグループから、偏見の強さは有意な傾向を見られた。しかし、有意な差がないことを分析結果からわかるようになった。そして、少数民族接触種類の分析結果は少数民族との「能動的」接触と「受動的」接触によって、少数民族に対しての偏見程度が違っている説にも支持していなかった。

性格と音楽選好の関連性

-自己肯定感と歌詞による比較-

問題・目的

現代の私達の周りは、様々な音楽が溢れている。特に、サブスクリプションサービスの普及により音楽がより身近で手軽な存在になっている。サブスクリプションサービスには、気分やシチュエーションに合わせた音楽を提供してくれるシステムが存在する。そして、そのシステムが存在することは、私達の楽曲の選択条件・好みには傾向があると考えられるだろう。そしてその傾向を決定する要因の一つとして性格が関係するのではないかと考えた。しかし、性格といっても定義が広く、様々であるため、本調査では性格を自己肯定感の高さとし、好みの楽曲の調査を行い、「自己肯定感が高い群」と「自己肯定感が低い群」の2つの群に分けて楽曲中に用いられる歌詞と関連付けて検討を行う。

方法

19歳から24歳までの男女45名にグーグルフォームによるアンケート調査を実施した。「自分が落ち込んだ状況下で聴きたくなる音楽」と、吉森(2015)の自己肯定感尺度作成時に使用された質問を用い、全9問、45点満点(点数が高くなればなるほど自己肯定感が低い傾向である事を示す)で点数化することにより個人の自己肯定感の高さを算出した。また、KHcoderを用いたテキスト分析により楽曲にどのような言葉が多く用いられているか及び、その言葉がどれだけの楽曲中に用いられるかについてを「出現曲数」とし、調査を行った。

結果・考察

「自己肯定感が高い群」と「自己肯定感が低い群」のそれぞれで選ばれた楽曲の頻出単語及び出現曲数について調査を行ったところ、「自己肯定感が高い群」で用いられた単語とその前後に続く歌詞が一般的に前向きなイメージを持つ単語が多く、未来の自身の成長や変化について前向きである歌詞が多く見られた。一方で、「自己肯定感が低い群」で頻出した単語と前後の歌詞は、現状維持や、現状の自身に対する後悔のような歌詞が多く見られた。森(2010)の研究で、歌詞の意味を重要視しているかどうかに関して有意差が出ており、歌詞の内容が自分の気持ちや心情と重ねられることに重点をおいていることが示唆されている。このことから、楽曲を選ぶ際に自分に重ねられる言葉に注目して選んでいるからこそ、自己肯定感の高さによって差が出るのではないか。

LINE グループにおけるグループ人数・関係性・立場が発言のしやすさに及ぼす影響

問題と目的

現代では SNS の利用者が増え、連絡手段が SNS であることはごく当たり前の事である。SNS の中でも、LINE は連絡手段に特化しており、個人間のメッセージや電話のやり取りだけでなく、複数人のグループチャットを作り連絡できる機能もある。しかし、LINE グループは個人間の LINE のやり取りよりも発言がしにくいことが多いと感じる人は多いのではないかと考えた。そこで、本稿では LINE グループにおける発言のしやすさ/しにくさの原因を明らかにすることを目的とし、それを踏まえ、LINE グループをより有効的に利用する為にはどうしたらいいのか、という点についても検討していく。

方法

Google フォームを利用したアンケートを行い、男女 100 名から回答を得た。本研究のアンケートでは、最も発言しやすい/しにくいグループの種類と人数、そしてそれぞれのグループにおいて何故発言しやすいのか/しにくいのかという理由を自由記述で回答を求めた。また、それぞれのグループにおいて自分はリーダー的であるのか、そうではないかという役割を問う質問を 5 件法で回答を求めた。

結果と考察

発言のしやすさに最も影響するのはグループの構成メンバーの関係性であることが分かった。人数や役割に関しては、あくまでも関係性が良い事が前提で影響する。発言のしにくさには、構成メンバーの関係性・人数・立場等全てが大きく影響する。構成人数に関しては、各個人が人数が多いと感じていれば、発言しにくいと感じることが考察できる。役割に関してはリーダー的ではない・またはそれに近いことは発言のしにくさに大きく影響するが、発言のしやすさにはあまり影響しないことが明らかになった。リアクションの有無に関しては今回あまり回答が得られなかった。“無視されたくない”という感情からグループの発言のしにくさに大きく影響すると考えていたが、関係性・人数・立場の方がより大きな影響をもたらしていることが明らかになった。

グループをより有効的に使うためには、実際の活動の中で多くの人が発言する場面を増やすことであったり、年齢や立場の壁を取り除いて関係を築いたり、誰かがグループで発言した時に自らが積極的に反応したり等、誰でも発言しやすい環境づくりが必要なのではないかと考える。また、大人数の LINE グループで何か意見を求めたりする場合は、投票機能やノートのコメント機能等を使用すると、より多くの人の意見を反映しやすい可能性も考えられる。

SNS の依存度と評価不安 —対人関係構築意識による差異—

問題と目的

本研究では、SNS 依存の原因について検討することを目的とした。SNS が普及したことによって、SNS への依存が大きな問題となっていることから、SNS 依存の原因に関する研究も数多く行われている。その中で、SNS 依存の原因として、他者からの評価に対する不安を指摘している研究があるが、評価不安を感じたときに SNS にのめりこんでしまう人と、そうでない人の違いについてはまだ明らかになっていない。そこで、本研究では、評価不安と対人関係構築意識が SNS 依存に及ぼす影響について検討していく。

方法

大学生 106 名（男性 44 名、女性 62 名、平均年齢 19.9 歳）を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は（1）天野ら（2018）が作成した SNS 依存尺度、（2）岡田（1993）が作成した友人関係様式尺度、（3）中村・高木（2012）が作成した評価不安に関する項目で構成されていた。

結果・考察

友人関係様式を岡田（1993）に従い、「群れ志向」、「やさしさ志向」、「対人退却」の三群に分類し、「群れ志向」と「やさしさ志向」を対人関係構築意識が高い群とし、「対人退却」を対人関係構築意識が低い群とした。そして、それぞれの項目の関連性を検討するため、相関分析と重回帰分析を行った。その結果、SNS 依存と評価不安の間には有意な相関がみられ、先行研究を支持する結果となった。このことから、評価不安が SNS 依存に対して悪影響を及ぼす可能性が示唆された。しかし、SNS 依存と対人関係構築意識の間には有意な相関はみられなかった。友人関係様式の三群の間でも有意な相関がみられたことから、友人関係様式の項目が、誰にでも当てはまる普遍的なものになってしまっていた可能性が考えられる。

また、友人関係様式である「対人退却」と評価不安の間に有意な相関がみられており、評価不安を感じやすい人が、ストレスから逃避するために、対人退却傾向になるといった因果関係がある可能性が示唆された。今後の研究において、各友人関係様式と評価不安の間の関連性についても、より深い調査をしていく必要があると考えられる。